

論 文 内 容 要 旨

片頭痛と睡眠時ブラキシズムの関連性：

ブラックスチェッカー[®]を用いた

咬合接触様式のパターン解析

神奈川歯科大学大学院歯学研究科

歯科矯正学講座 加藤 桃子

(指 導 : 河 田 俊 嗣)

論文内容要旨

睡眠時ブラキシズムは生体の不随意運動であり自覚し難いことから、その詳細は不明なことが多い。これまでに睡眠時ブラキシズムと一次性頭痛との関わりが指摘されているが、報告の多くは一次性頭痛の一つである緊張型頭痛との関連性を示唆するものであり、片頭痛との関わりについての報告はわずかである。そこで本研究は、片頭痛と睡眠時ブラキシズムの関わりを知る目的で、片頭痛患者を対象に睡眠中の咬合接触状態を調べることによりブラキシズムの発現様相を検討した。

研究対象は、富士通クリニック内科頭痛外来にて国際頭痛分類により片頭痛と診断をされた女性 80 人（平均年齢 42.98 ± 9.6 歳）を片頭痛群とし、神奈川歯科大学の職員や学生より、風邪や二日酔いなどを含め頭痛の無い健康な女性 52 人（平均年齢 39.25 ± 9.2 歳）をコントロール群とした。ブラックスチェッカー®を用いて、両群の睡眠時ブラキシズムの咬合接触状態を記録し、ブラックスチェッカー®の印記を解析することにより咬合接触様式と咬合接触面積を調査した。

その結果、年齢、BMI および体温について 2 群間では有意差は認められなかった。睡眠時ブラキシズムの咬合接触様式の分類については、作業側において、片頭痛群とコントロール群の間で、症例の分布に有意差が認められ ($P < 0.001$)、片頭痛の有無と作業側の睡眠時ブラキシズムの咬合接触様式との関連が示唆された。一方、非作業側では有意な関係は認められなかった ($P = 0.465$)。さらに、片頭痛群とコントロール群は、共に前歯部から大臼歯部にかけて咬合接触面積の割合が有意に大きくなることがわかった。また、前歯部、小臼歯部および大臼歯部を比較したところ、全ての部位において片頭痛群の咬合接触面積の割合はコントロール群に比べ、有意に大きい結果となった。

片頭痛群とコントロール群間では、睡眠時ブラキシズム時にいくつかの特徴的な所見が認められた。片頭痛群において睡眠時ブラキシズムは全ての歯で行われており、咬合接触面積の割合も大きいことから、睡眠時のグライディングが示唆された。さらに、大臼歯部での接触が大きいことから、大臼歯部が片頭痛群の睡眠時ブラキシズムへ大きく関与していることが示唆された。片頭痛の発生機序は未だ明らかとなっていないが、その誘発因子の一つとして睡眠時ブラキシズムが関わっている可能性が示された。本研究の結果より、咬合面形態などの分析を行う等、片頭痛患者における歯科領域の評価の必要性を検討するべきであると考えられる。現在、片頭痛の治療法は主に薬物治療が主体であるが、片頭痛患者の歯列の特徴を分析することにより、片頭痛治療のみならず片頭痛予防の一助となる可能性が示唆された。